

日本語学習者の中級レベル観

— 中級文法クラスを受講した学生の意識調査を中心に —

許 明子 鶴町 佳子

要 旨

中級レベルは、授業の目標があいまいであることのほかに、配置される学習者の持つ力の差が大きいこと、ニーズも様々であること、そのため既存の教科書ではすべての学習者に対応するのが難しいことなどが問題点としてあげられる。

そこで、筆者らは中級レベルで文法授業を受講している学生を対象にアンケート調査を行い、中級レベルに対してどのような意識を持っているのか、学生は自分自身の日本語力に関してどのように認識しているのか、またどのような方法で学習しているのか、日本語の上達のために何が必要だと思うのか、などについて実態を調査した。

その結果、日本語学習歴が非常に幅広く、その背景も様々であること、学習目的が多様化していること、学習者自身は書く技能を最も苦手と感じていること、日本語の上達のためには自律学習が重要であると認識していること、などがわかった。

本稿では、これらの結果について詳しく報告、分析し、今後の中級指導のあり方を探る。

【キーワード】 中級レベル観 学習者の意識 学習者の背景 学習目的 技能別日本語力

Learners' Views on Intermediate Japanese Language: an awareness survey of intermediate grammar class students

HEO Myeongja, TSURUMACHI Yoshiko

【Abstract】 There are many problems at the intermediate level of Japanese language classes, e.g. there are great differences in students' knowledge and their individual needs, and existing textbooks cannot meet the requirements of every student.

Therefore, we conducted a questionnaire survey of students who took a Japanese intermediate grammar class, in order to find out that what kind of opinion the students have about intermediate level Japanese, how they rate their Japanese ability, what approach they take to learning Japanese, and that what they think is necessary for furthering their Japanese ability.

The survey shows that the length of students' Japanese learning experience and their background are differ greatly, that the purpose of learning Japanese has become diversified compared with former students, that they feel Japanese writing skills to be the most difficult Japanese language skills, and that they realize that autonomous study is very important for advancing their Japanese ability.

This paper reports on this survey in detail, and considers options for managing intermediate level Japanese classes.

【Keywords】 Learners' Views on Intermediate Japanese, learner's awareness, learners' background, purpose of study, Japanese ability by skill

1. はじめに

筑波大学留学生センターでは様々な身分の留学生が日本語を学んでおり、学習者の日本語力、学習ニーズ、学習スタイル、学習背景および目標なども様々である。筆者らは2007年度より当センターで開設されている中級レベルの文法クラスを担当しているが、学習者および学習ニーズの多様性に加え、30名を超える大人数のクラスになったため、効率的なクラス運営のために様々な工夫を凝らしながら試行錯誤している。鶴町・許(2008)では中級前期レベルの文法クラスについて、試作教材やクラス運営の工夫を中心に報告を行った。

筆者らは中級レベルの文法授業を担当するにあたって、予習・復習型の授業を進めるために、授業後にはまとめた内容の作文を書くことを課題とし、授業前には新出語彙の意味と読み方を調べ、授業内容も予習することを義務づけた。それには、学生に自主的な学習を促すとともに、様々な学習方法の中で学生自身に合う学習スタイルを見つける一つのきっかけにしてほしいというねらいがあった。語彙調べと予習、学習項目による会話の練習と作文などが一連の活動である。

以上の目標のもと、自作教材を作成し1年かけて授業を行ったが、学期後の授業アンケート調査の結果から、学生の授業に対する評価はおおむね肯定的であることがわかった。しかし、中級レベルに対する教師の考え方や教材のねらいについて、学生はどのように受け止めているのか、また学生自身は自分の日本語力についてどのように認識し、上達するためにどのような方法で日本語を勉強しているかなどの実態について十分把握しているとはいえない。

そこで、学生の中級レベルの日本語に対する認識および中級文法の勉強の仕方に関する実態を把握するためにアンケート調査を行った。本稿の目的は、中級レベルにプレースされた学習者の意識調査を通して、中級レベルの日本語教育について考察し、中級レベルのクラスを運営するひとつの手がかりを模索することである。

本稿の構成としては、第2章で中級レベルの日本語教育について教室現場の問題点、教科書の問題点、学習者の意識について先行研究をまとめる。引き続き、第3章で中級レベルの学習者の意識調査について分析結果を報告する。

2. 中級レベルの日本語教育に関する先行研究

2.1 中級とは

日本語教育における中級の定義については、これまでも様々な先行研究において検討がなされている。共通して指摘されているのが、初級と上級については各日本語教育機関において共通した見解があるが、中級についてはあいまいな点が多い、ということである。

新井・平田(2001)では、初級について、「教育機関や教科書によって方法的なアプロー

チの差異はあるが、内容については大筋は共通している」、「構造シラバスをとるか、場面シラバス、機能シラバスをとるか、あるいはそれらを折衷するかの違いはあっても、一般に初級文法とされているものをほぼ網羅するという点では一致がある」と述べている。上級についても、「生教材を使う、ないしはそれに進むための橋渡しの教育として、目標はほぼ定まっていると考えられる。教材として市販されているもののほとんどが生の日本語を素材にし、その理解と習得を目指して作られている」と述べている。だが、中級については次のように述べている。「初級と上級の間に位置する中級については、教育内容についての整理が十分であるとは言い難い」。

また、中村（1999）では、日本語能力試験の認定基準を紹介し、4級、3級（300時間程度学習したレベル）を初級、2級（600時間程度学習したレベル）を中級、1級（900時間程度学習したレベル）を上級と考えるのが一般的だとしている。しかし、300時間ごとの学習時間でレベル分けをする、と考えるのは理解しやすいが、「この300時間で学習した文法、語彙、漢字が各機関及び各教科書で異なりがあることは予測しやすいことである」とも述べている。ただし、この状況にあっても、「初級については文法、漢字、語彙、機能、場面、話題を加えても共通するものが多い。しかし、中級となると何が中級の教育なのかということは、必ずしも、明確ではない」としている。

こうした中級のあいまいさは、中級用に市販されている日本語の教材を見てもわかる。中村（1999）は、代表的な中級用教科書6冊についてその第一課を詳しく見ることで一般的な中級のスタートラインを探ろうとしているが、教材により、いわゆる初中級を視野に置いたもの、中級から上級を目指したもの、初級と中級との間にギャップのあるものなどが混在しているため、一般的なスタートラインは見えてこないとしている。新井・平田（2001）も、「「中級」と銘打った教科書でも、内容を見ると難易度には非常に幅がある」と指摘している。このほか、梁嶋他（1993）では、中級日本語教科書35冊で扱っている文型を取り上げて調査しているが、複数の教科書に共通して表れている文型は大変少ないと報告している。このように、中級の教科書とはいっても、想定しているレベルは一定しておらず、提出する文型も大きく異なっている。中級の教科書を見ても、中級の輪郭ははっきりとは見えてこないのである。

2.2 中級の問題点

前節では、中級というレベルに関して、いまだあいまいな定義しかなされていないことを見た。しかし、「中級」の学習者は「初級」でもなく「上級」でもない者として多数存在しており、彼らは中級特有の問題を抱えている。ここでは、中級の問題点にはどのようなものがあるのか整理する。

まず、一番大きい問題点としては、中級の学習者というのは持っている力の差が大きい

ということである。新井他(2006)は、「初級終了直後の学生には、初級の習得が十分な学生、まだ復習が必要な学生等、同じクラスに在籍していてもレベル差がある」と述べている。同じ機関で同じ時間数初級を学んだ者であっても、学習者によって力の差がついていることは往々にしてある。また、ある日本語教育機関で学んでいた者が別の教育機関に移るとき、以前に初級レベルのコースを修了しており、上級でもないと思なされれば、中級に配置される。中村(1999)によれば、日本語教育機関の多くでは、異なる機関で学習した学生を受け入れて授業を行うことが多いという。つまり、日本の教育機関における中級レベルのクラスには、どのようなことを学んできたのか、どのくらいの力がついているのか、レディネスがばらばらの学生たちが多数いることになる。これに加え、機関によっては、漢字圏の学習者と非漢字圏の学習者も混在している。言うまでもなく、漢字圏と非漢字圏の学習者では、漢語が多くなる中級以上の日本語に対する処理能力は異なってくる。以上のように、同じクラスの中のレベル差が大きく、レディネスの多様な学習者が混在することが、中級の大きい問題点である。

次に、中級では、教材の仕様が大きく変わるため、学習者が戸惑いがちであるということがある。佐藤(2000)は、中級日本語教科書を概観する中で、「初級は話しことば、中級は書きことば」という日本語教科書観が一般的であり、「従来より日本語の中級教科書というものは読解教材を中心にできたものであった」と述べている。つまり、初級では話しことばが学習の中心であったのが、中級からは書きことばが中心になってくるため、読解が教材の柱になっていることが多い。そのことから新井・平田(2001)は、「『初級』を終了した学習者は、教科書の仕様が変化したことに戸惑い、自身の発話能力に不満を持つ、あるいはそれが伸び悩んでいると思ひ込むことが多い」と述べ、現在の中級教材が学習者に不安を与えていることを指摘している。

またさらに、中級レベルの学習者のニーズが少しずつ変わってきているということも一つの問題点である。そもそも中級教材が読解中心であることについて、佐藤(2000)は「このような教科書像というものは、日本の大学あるいは大学院において専門分野を学び学位を取るという留学生のニーズが基になってできたものだと考えられる」としている。つまり、かつては中級レベルにいたる学習者のほとんどがアカデミックな日本語を早く理解したいというニーズを持っており、一般の中級教材はそうしたニーズに応えるために読解中心であったのである。しかし、佐藤(2000)、新井他(2006)も指摘しているように、日本で日本語を学ぶ者すべてがこうしたアカデミック目的の学習者ではなく、特に大学では、一年間の短期プログラムで来日し、中級レベルに配置され日本語を学ぶ学生が増えている。短期プログラムの学習者は短い滞在の中で、学位取得のためではなく、日本文化に触れながら日本語の能力も上達させることを目標としている。しかも、非漢字圏の者が多い¹。こうした特徴を持つ学習者にとっては、アカデミックなニーズにより開発された書きこと

ばの読解中心の教材はハードルが高く、新井他（2006）では「学習ストレスを抱えて意欲が低下する学生も出てきた」と報告している。

以上のことから、中級の問題点は、中級レベルとされる学習者のレディネス、ニーズが多様であること、そして中級の教材も市販のものでは学習者を満足させられないケースが多くなっているということ、とまとめられるだろう。

2.3 中級に対する学習者の意識

ここまで、中級の定義、中級の抱える問題点について、主に教授者側の視点で見てきたが、学習者自身は中級というレベルをどう見ているのだろうか。

大木(1994)は、とある大学の日本語コースで学生の自由意志でクラスを選ばせると、まったくの日本語能力ゼロの学生以外はほとんど全員が中級クラス入りを希望したという事例を紹介し、「つまり、まったくゼロ能力の初級以外はすべて中級ということであるが、これが既習者の意識であり、実態である」と述べている。長野他（2003）でも、海外の大学で日本語初級を学習してきたものの、初級後半の内容を十分に消化し身につけていると言いがたい短期プログラムの学生について、一般的に以下のような心理的特徴を持つとしている。「1）自国の大学で一応初級レベルの日本語を学習しているので、自分は中級レベルのクラスへプレースされるはずだというプライドを持っている。2）構造シラバスになっている初級クラスで自分が既に知っていることをもう一度学習するのは堪え難いと思っている。3）初級文法の復習は自分でなんとかするので、すぐ中級クラスへ行きたいと思っている。つまり、クラスで易しいことは勉強したくないと思っている。」

このように、教師から見て初級項目の運用力が足りないと思われる学習者でも、まったくのゼロ初級でなければ中級クラスに入りたい、入れるはずだと思い、あまり易しいことは勉強したくないと思っているようである。新井他（2006）はさらに、「初級と中級の橋渡しには、毎学期非常に苦心している。中級内容が多いと学生から「高度すぎる」とストレスを訴えられ、かといって初級の復習に重点を置くと「簡単すぎて役に立たない」と苦情が出てしまう。まさに教師にとってはあちらを立てればこちらが立たず、といった状況であるが、当の学生自身も何をやっても100%満足しにくいこの中途半端な時期を自覚しているようでもある」と中級レベルの学習に戸惑う学生の様子を紹介している。

上に紹介した中級に対する学習者の意識は、参考にはなるもののあくまで大木（1994）、長野他（2003）、新井他（2006）らの所見であり、学習者の意識を客観的に調査したものではない。中級という、あいまいで問題点を多く抱えるレベルにおいて、これからの対応を考えていくには、学習者自身の意識を知ることが大きな鍵になってくるのではないだろうか。

3. 学習者の中級レベル観

前述したように中級レベルに対する学習者の意識は明らかにされていないのが現状である。「初級」と「中級」の捉え方には様々な見解があり、どこから「中級」とするかについてはいろいろな考えがあるだろう。筑波大学留学生センターの日本語補講授業では、およそ400時間程度の教室学習を終え、初級で扱う文法項目を一通り学習した学生を中級レベルと想定し、プレースメントテストの結果によってプレースしている。

3.1 筑波大学留学生センターにおける中級レベルの文法クラスのねらい

筆者らは中級前期レベルの文法クラスを担当しているが、場面シラバスによってカリキュラムを立てた。初級で学んだ内容の復習を通して定着を図りつつ、類似表現の使い分けを中心に初級より広く深く文法項目を学習することを目標とした。

一方、学習者に対しては、文法項目の知識を理解するだけにとどまらず、応用力を身につけるよう予習、復習を義務とした。学んだ文法項目を使って「書く」「話す」活動を行うことによって、単に知っているだけではなく、日本の日常生活もしくは大学生活の場面で表現できるような応用力を身につけることを目標とした。そのために、各課が終わったらその課で学んだ文法項目を使って、「話しましょう」のコーナーで練習するようにした。また、各課の文法項目を使って与えられたテーマについてまとめた内容の文章を書く作文を宿題として課した。

以上のシラバスによる授業運営は学習者に予習、復習の習慣をつけて自主的に学習を行うよう促すためのものである。各課で学ぶ文法項目の解説を事前に読む、学習者自身が辞書を引いて新出語彙を調べる、学んだ文法項目を使った作文を書く、活用表を完成するなどの活動は、学習者自身がいろいろな学習方法を試してやっていくうちに、自分に合う学習方法を見つけるための練習でもある。これらの活動を通して今後の継続的な学習ができるようにすることをねらいとした。

3.2 学習者を対象としたアンケート調査

3.2.1 調査の目的および概要

前章では中級レベルの問題点について、学習者のニーズの多様性、漢字圏・非漢字圏の混在、学習者の日本語力の差などを指摘した。筑波大学留学生センターの中級レベルにも同様な問題点があるが、大人数のクラス運営については鶴町・許(2008)で筆者らの工夫を中心に報告した。教師は学生のニーズを把握し、自主的な学習を促すために様々な工夫を行っているが、それだけではなく、学生の学習に関する実態を把握することも必要である。

そこで、中級レベルで学んでいる学生を対象に、学習者自身の日本語学習観を調べるためにアンケート調査を行った。アンケート調査は2008年度1学期が終了した段階で、筑波大

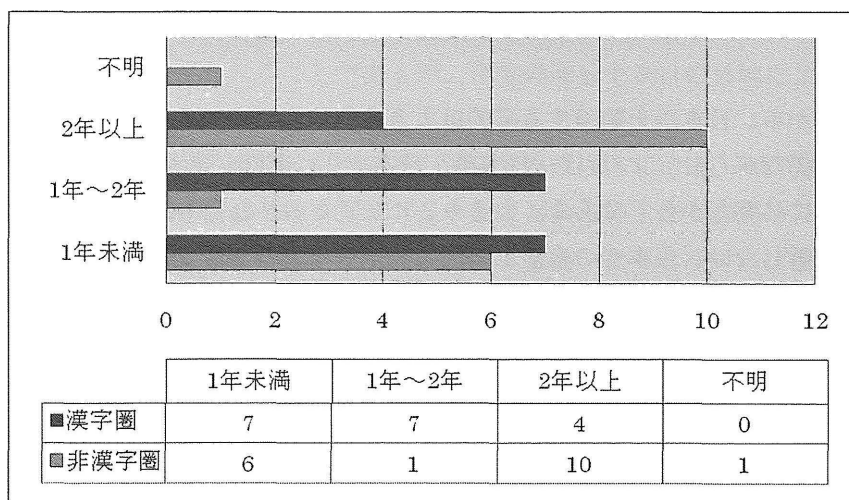
学留学生センターの中級前期レベルの文法科目である J511、J514 の授業を受講した学生を対象に行った。調査の目的は、学生の学習バックグラウンドを把握するとともに、学生が各自の日本語力についてどのように認識し、どのような問題意識を持っているのか、また学習者自身が感じている問題点を解決するためにどのような努力をしているのかを知るためである。さらに、教師のクラス運営に関する意図を学習者がどのように理解し、学習に生かしているのかについて学生からのフィードバックを受けることも目的の一つである。

アンケートの設問には大きく 2 つの内容を盛り込んだ。一つは学生自身の中級レベルに対する考え方を聞く項目、もう一つは中級文法 (J511、J514 でも良い) に対する学習者の意識を自由記述する項目である (資料参照)。中級レベル観については、中級レベルで簡単だと思う技能、もしくは難しいと思う技能を選択し、中級レベルの各技能についてどのような認識を持っているかについて自由記述形式で回答するようにした。さらに、中級レベルで勉強するために一番大切だと思っていること、日本語の上達のために学習者自身がやっていることについて自由に記述するようにした。

アンケートは J511、J514 の文法クラスを受講した学生を対象に実施し、36 人から回答が得られたが、漢字圏、非漢字圏は 18 名ずつで同数であった。次節で調査結果について詳しく述べる。

3. 2. 2 学習者の背景

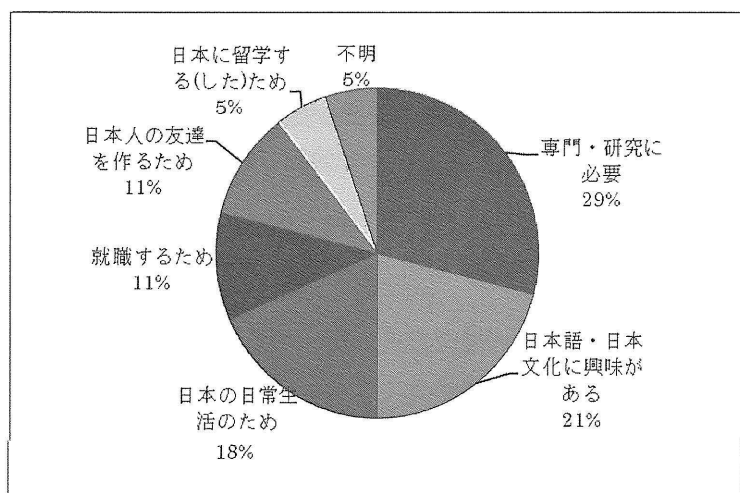
中級レベルで勉強している学生の学習背景についてまとめる。まず、日本語学習歴については、来日前に国で日本語の学習を始めた学生もいれば、来日後に学習を始めた学生もいる。大まかな傾向としては、漢字圏の学生は学習歴が 2 年までの学生が多く、非漢字圏の学生は 2 年以上の学生が多い。学習期間をグラフでまとめると次の通りである。



〈図 1〉日本語の学習期間

日本語学習期間は学生の自己申告によるものであるが、〈図1〉では来日前と来日後の学習期間を合わせて記した。来日前から日本語を勉強していた学生の中には、国で日本語を勉強してから数か月から数年のブランクがあって日本で学習を再開した学生や、教室学習だけではなく独学で数か月間勉強しただけの学生もあり、学習歴は様々であった。〈図1〉のグラフでもわかるように、漢字圏の学生は1年未満と1年～2年の学習者が多く、2年以上の学生は4人しかいなかった。その半面、非漢字圏の学生は2年以上の学習歴を持つ学生がもっとも多く、アンケートに回答した学生の3割近くを占めている。

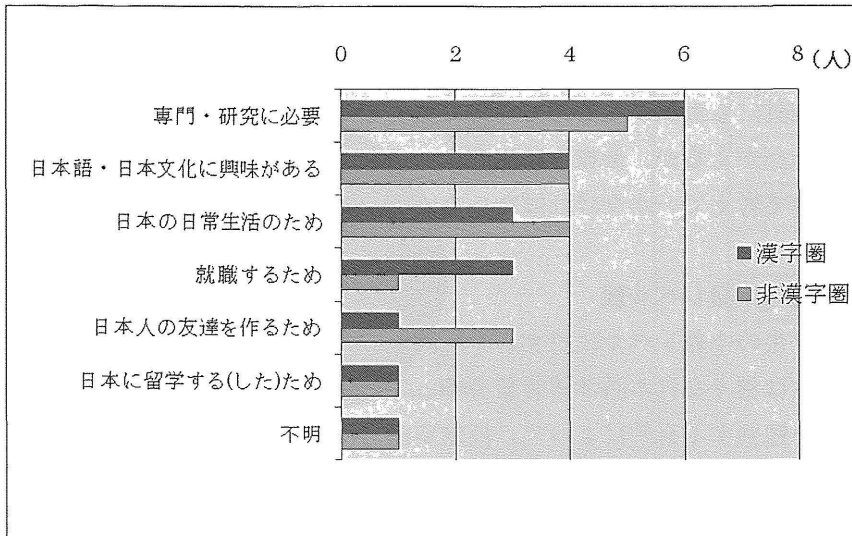
次に、日本語を勉強する目的に関する質問は自由記述式の問題であったが、二つの目的を書いた学生が多く、「論文を書くため、将来日本の会社に就職するため」のような回答が多かった。回答の内容を大きく6つに分けてまとめたのが〈図2〉である。



〈図2〉日本語を勉強する目的 (全体)

調査の結果から、日本語を勉強する目的は大きく三つあげられる。一つは「専門・研究に日本語が必要だから」、二つ目は「日本語・日本文化に興味があるから」、三つ目は「日本の日常生活に必要なだから」である。つまり、アカデミックな日本語を学びたい、日本語・日本文化を理解したい、日本での生活に必要な生活日本語を学びたい、というニーズが多いことがわかった。

日本に留学する学生の目的は大きく二つに分けられる。一つは、日本で学位をとるために来日し勉強している学生と、短期交換留学生として日本の文化や日本語を学ぶために来日している学生である。当センターで日本語を学んでいる学生の傾向として、前者は漢字圏の学生が多く、後者は非漢字圏の学生が多い。そこで、学習目的を漢字圏、非漢字圏別に分けて、その傾向を分析した。その結果をグラフで示すと〈図3〉のようになる。



〈図3〉日本語を勉強する目的（漢字圏・非漢字圏別）

もっとも多くの回答が出たのは「専門・研究に必要」で、次いで「日本語・日本文化に興味がある」「日本の日常生活のため」であった。「専門・研究に必要」は漢字圏の学生が若干多く、「日本の日常生活のため」は非漢字圏の学生が若干多かったが、漢字圏・非漢字圏で大きな差は見られなかった。日本で学び、日本で日常生活を営んでいる外国人留学生にとって「専門・研究に必要」「日本語・日本文化に興味がある」「日本の日常生活のため」という日本語の学習目的は当然ともいえる。

一方、漢字圏、非漢字圏の学生で差が見られたのは、「就職するため」と「日本人の友達を作るため」であったが、「就職するため」は漢字圏の学生が多く、「日本人の友達を作るため」は非漢字圏の学生が多かった。上記の目的はいずれも留学生が日本語を学ぶ目的として一般的によくあげられることであるが、学生の身分や来日の目的によって、少しずつ差が見られたり、優先順位が違ったりするのであろう。

「専門・研究に日本語が必要」という記述の具体的な理由としては、「専門書を読むため」「論文を書くため」「指導教官とのコミュニケーションのため」などがあったが、中級レベルにおいても既に日本語で専門書を読んだり、論文を書いたりしなければならない学生が多く、今後の継続的な支援が必要であることがわかった。

以上、中級レベルで勉強している学生の学習背景、学習目的について述べたが、中級レベルの問題が含蓄して現れていることがわかる。たとえば、独学で3ヶ月間勉強しただけの学生が中級レベルにプレースされているが、その学生は体系的な学習がなされていないために基礎的な部分の知識が足りなかったり、活用が不安定だったりする問題があった。また、2年以上の学習期間を有する学生は授業内容に既習文法が多いことから、応用力を

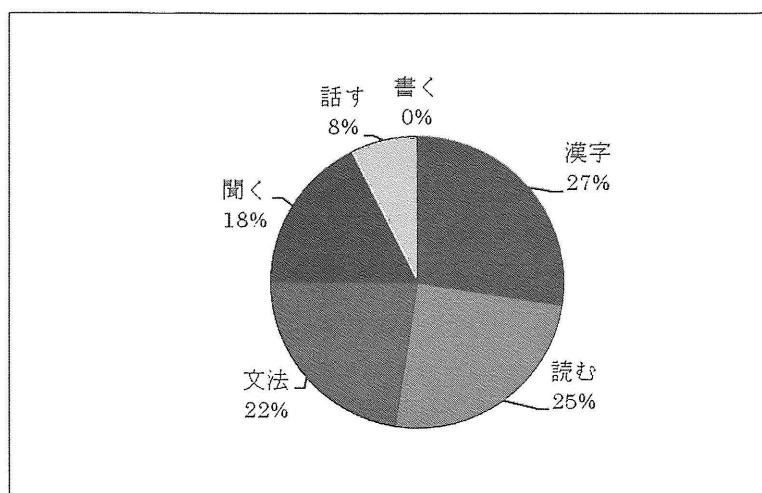
身につけるより、新しい項目を勉強したいという希望が強く、クラス活動ではモチベーションが下がるという問題が生じていた。日本語を勉強する目的は、学生のモチベーションや、クラス運営の方針にも直決するもので非常に重要である。学習目的の多様さは今回の調査の結果からもうかがえるが、多様な学生のニーズにどう応えるか、どのようなクラス運営をするかを改めて考えていかなければならない。

3. 2. 3 学習者の中級レベル観

本節では、学生の中級レベルに対する学習観について述べる。前節で述べたように、中級レベルの学生は様々な日本語学習背景を持っており、日本語の技能別能力も様々である。学生が日本語を勉強する目的によって、技能別能力にも差が見られると思われる。ここでは学生が自分自身の日本語力についてどのように認識し、日本語の上達のためにどのようなことをしているかについて調べた結果について述べる。

まず、初級レベルに比べて中級レベルにあがって難しくなったと感じたことについて、自由記述式で回答してもらった。その結果、「書く」「話す」などの表現力を必要とする技能が難しいという学生が多かった。学生の回答を具体的に見ると、カジュアルな話し方が難しい、勉強したことを実際の場面で使うのが難しい、日本語で書くことが難しいなどの記述が多く、表現力を必要とする技能を難しいと感じていることがわかる。中級以上のレベルでは構文・文型練習に加え、それらを使って話す、書くなど、応用力を必要とするためであろう。その他、漢字や語彙が難しくなったと答えた学生が8名、文法・文型が難しくなったという学生が2名、難しいと感じないと答えた学生が2名であった。中には、中級では英語による説明がないため難しいという学生もいた。

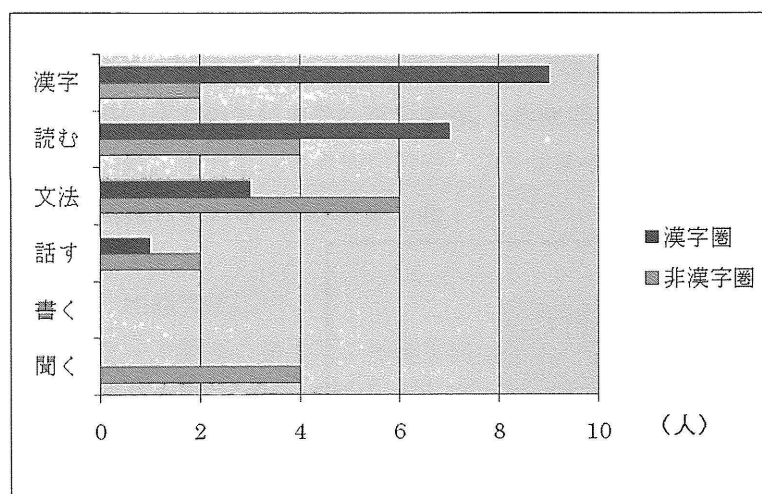
次に、日本語の技能の中で一番簡単な技能、一番難しい技能について、文法、話す、書く、読む、聞く、漢字の中から選択してもらった（複数選択可）。その結果、〈図4〉〈図5〉で示すように、漢字、読む、文法、聞く、話す、書く、の順にやさしいと感じていることがわかった。他方、難しいと感じている技能は、〈図6〉〈図7〉で示すように、話す、書く、漢字、それ以外の順になった。



漢字	11 (人)
読む	10
文法	9
聞く	7
話す	3
書く	0

〈図4〉 やさしいと感じている技能

さらに、簡単だと感じている技能について漢字圏、非漢字圏別にわけて分析すると、〈図5〉で示すように、漢字圏の学生は「漢字」「読む」「文法」の順にやさしいと感じ、非漢字圏の学生は「文法」「聞く」「読む」の順にやさしいと感じていることがわかった。

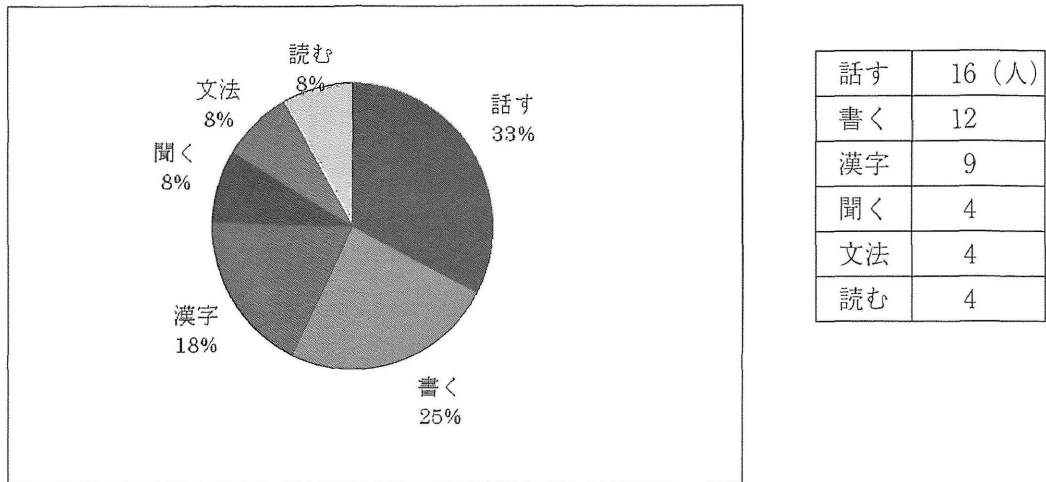


〈図5〉 やさしいと感じている技能：漢字圏・非漢字圏別

漢字圏の学生にとって「漢字」が学びやすい技能であることは当然かもしれないが、漢字の意味を理解して「読む」技能に生かしていることで読む技能もやさしいと感じる学生が多かったのではないかと思います。注目すべき点は、「書く」技能について簡単だと感じている学生が一人もいなかったことである。漢字圏の学生も非漢字圏の学生も「書く」技能

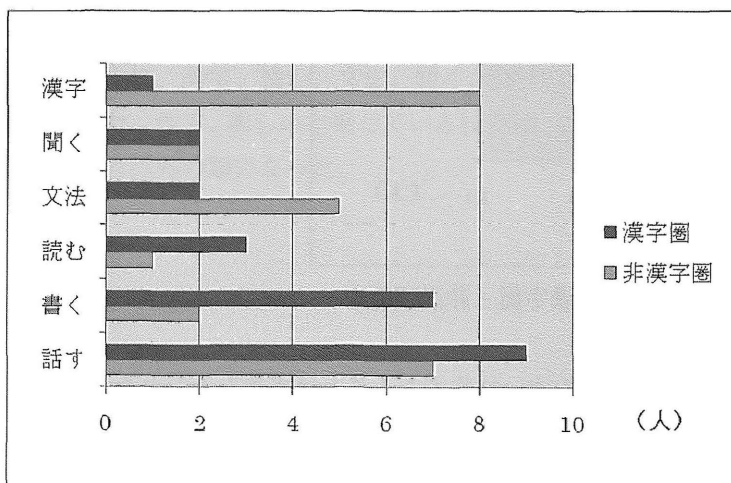
について難しいと感じており、それは「一番難しいと感じている技能」に関する質問にも同様な結果が現れている。

次に、難しいと感じている技能は何かに関する質問には、全体の傾向は〈図6〉で示すように、「話す」「書く」「漢字」の順になっていた。



〈図6〉 難しいと感じている技能

これを漢字圏、非漢字圏別に分析してみると、〈図7〉で示すように、漢字圏の学生は「話す」「書く」技能が難しいと感じている学生が多く、非漢字圏の学生は「漢字」「話す」「書く」の順に難しいと感じていることがわかる。



〈図7〉 難しいと感じている技能：漢字圏・非漢字圏別

学習者自身が感じている日本語技能別難易では、日本語の産出力を必要とする会話技能と作文技能を難しいと感じており、文法はあまり難しいと感じていないことがわかった。

しかしその一方で、「中級レベルで一番大切だと思うことは何か」という自由記述式の質問に対して、文法もしくは文法と関連する項目と答えた学生が10名もいた。文法項目そのものの学習はもちろん、「文法を習って正確に話す」「正しい文法を使う」「文法を詳しく勉強する」などの意見もあった。つまり、文法を勉強することによって正しく話したり、語彙を増やしたり、長い文を作ったりすることができるようになることと認識していることがわかる。

さらに、「もっと日本語が上手になるためには何が必要だと思うか」という質問に対して、授業での積極的な活動をあげた学生もいたが、半分以上の学生が、復習、毎日の練習、新出語彙調べ、勉強する時間を増やすなどのような自主的な学習をあげていた。授業時間だけではなく、学習者自身がもっと努力しなければならないということについてしっかりとした認識を持っていることがわかった。その他には、日本語で話す練習相手が必要である、漢字を覚える、日常生活でたくさん話す、時間がもっと必要、授業に積極的に参加するなどの意見もあった。

この結果で一つ注目すべきことは、「日本語が上手になるために必要だと思うこと」に対する答えと、「難しいと思う日本語の技能」「中級レベルで大切だと思うこと」の答えが一致している学生が多かったことである。つまり、文法が難しいと感じている学生は、「日本語の文法と言葉を正しく使うこと」が日本語の上達のために必要であると回答しており、読む技能が難しいと感じている学生は「たくさん単語を覚えると読解能力が高まる」と回答していた。学習者は各自の学習歴、学習背景から、今後の学習に必要と思われることを的確に認識していることがわかった。

3.2.4 中級文法について

アンケート調査の後半で、中級文法に関する質問として、簡単だと感じる文法項目、難しいと感じる文法項目、新しいことばを調べる活動に関するコメント、まとまった内容を書く作文の宿題に関するコメント、最後に文法の勉強の仕方について、自由記述式で回答してもらった。

その結果、簡単だと思う文法項目には、自己紹介、伝言、副詞など、J511、J514の授業で扱った文型もしくは場面をあげた学生が多かった。中には「簡単なものはなかった」のように全部難しかったと回答した学生が4名いたのに対して、「初級で学んだ項目なので難しい項目はなかった」と回答した学生も3名いた。「難しいと思う文法項目」の中でもっとも多かったのは敬語の使い方であった。授業では、自己紹介の場面で使われる敬語を中心に取り上げたが、尊敬表現と謙譲表現の使い分け、場面による適切な敬語の使い方が難

しかったようである。敬語の他に、ムード、動詞の活用、助詞、ニュアンスの違いを理解することなど、具体的な項目が取り上げられていた。

さらに、J511とJ514の文法授業では新しいことばを調べる宿題を課したが、それについて各自の意見を自由記述式で回答してもらった。その結果、34名の回答者の中で28名から肯定的な回答が得られており、学生にとって有効な活動であったと考えられる。回答の例としては「新しいことばが勉強できるからよかった」「予習することになるので非常に良かった」「単語をよく覚えられる」「ことばを調べることで授業前にことばの意味がわかっているので先生が教える内容が早くわかる」などの回答があった。一方、「漢字が難しい」「非常に難しかった」「簡単すぎる」などのマイナスの評価もあった。

授業で学んだ文法項目を使ってまとめた内容の作文を書く宿題に関しては、「非常に難しかったが、役に立った」という回答が多く、35名の回答の中で23名が「役に立った」「クラスで学んだ文法を使うチャンスになった」「とてもいい練習だった」「自分で文を作ってみるチャンスくれた」と回答していた。その反面、「大嫌い」「難しい」「ハードチャレンジだった」というマイナス評価の回答も見られた。

新しいことばの読み方・意味を調べる宿題と作文を書く宿題は、学習者にとっては負担が大きい活動であることは教師側も認識していた。しかし、継続的に学習を行っていくためには、教師から与えられる知識だけではなく、学習者自身が主体になって学習を進める、もしくは情報を探す習慣を身につけなければならない。学生が自分に合う学習方法を見つけるための活動の一つとして、新しいことばを調べて予習をする、学んだ文法項目を使って話す練習をしたり作文を書いたりする、といった活動を行ったが、その活動に対する教師の意図が学生にも伝わっていたようで、これらの活動に対する評価もおおむね肯定的であった。

最後に、文法の勉強の仕方に関する回答を紹介する。もっとも多かったのは、「授業を受ける前に予習をして、授業が終わった後宿題をしながら復習をする」という至極まっとうな、教師が期待している通りの回答であった。復習するときに国から持ってきた自国語で書かれた文法書、もしくは日本語能力試験対策用の文法解説書を参考にしているという回答も見られた。また、テレビをよく見る、ラジオを聴く、日本人の友達と日本語で話すといった日常生活で日本語を練習するようにしているという回答も見られた。その反面、「日本語のクラスのみ」「ほとんど勉強しない」「宿題だけ」と回答した学生が5名いた。この回答を書いた学生は、「すでに習った文法項目だけなので勉強する気が起きない」「新しい文法を勉強したい」などのコメントを寄せていた。筆者らは、日本語の文法の知識を学ぶだけではなく、応用力を身につけ、正確に表現する力をつけることを目標としているが、一部の学生のニーズには符合しなかったものと思われる。

4. おわりに

中級レベルは、初級から上級への移行期であるといえる。しかし、その移行期の中級レベルが1年以上も続いている学生や、途中で挫折する学生もいる。中級レベルの問題点について様々な角度から述べたが、それは当センターだけの問題ではなく、中級レベル本来の特徴でもあり、日本における日本語教育の多様性が顕著になってきたためであろう。

しかし、本稿の調査分析の結果からもわかるように、学生は教師の意図をしっかり受け止め、日本語の上達のために自ら努力している。受講者からは、中級レベルにあがって初めて辞書を引いた、辞書を引く習慣がついた、作文を書く時間がだんだん短くなった、先生の添削箇所が少しずつ少なくなってきたのでうれしい、などの意見が寄せられた。中級以降の上級レベル、さらには今後の継続的な学習を行うためには教室学習だけではなく学習者自身の努力も非常に大事な要因であろう。多くの学習者の継続的な学習を期待する。

また、短期プログラムで日本語を学ぶ学生が多くなっており、その学生たちのニーズに合う教科書の開発が急がれる。特に非漢字圏の学習者に対する問題点は第2章で述べたが、初級レベルの文法項目を復習しつつ、中級レベルで扱うべき語彙や文型を取り入れた複合型の教材の開発を今後の課題としたい。

引用文献

- 新井高子・斎藤ちぐさ・森田由記・山本和子（2006）「初中級教材集の開発—『文法が弱いあなたへ』に準拠して—」『留学生教育』第8号：87-92 埼玉大学留学生センター
- 新井高子・平田真美（2001）「聴解中心の初中級総合教科書に向けた調査研究」『留学生教育』第4号：19-28 埼玉大学留学生センター
- 大木隆二（1994）「中級教材の扱いとその周辺をめぐって」『九大留学生センター紀要』第6号：41-56
- 佐藤豊（2000）「日本語中級教科書について」『ICU 日本語教育研究センター紀要』10：1-12
- 鶴町佳子・許明子（2008）「多人数クラスにおける多人数クラスにおける文法授業実践報告—日本語中級前期 J511、J514 の学習者を対象として—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第23号：41-51
- 中村妙子（1999）「中級日本語教育について」『ICU 日本語教育研究センター紀要』9：27-36
- 長野ゆり・笹原幸子・寺下優子（2003）「総合日本語コース C1（初中級）クラスの開発と活動・教材開発」『金沢大学留学生センター紀要』第6号：13-30
- 梁嶋史恵・来嶋洋美・楠本はるみ・莊由木子・福谷正子・山崎深雪（1993）「中級読解教材の文末表現」『日本語国際センター紀要』第3号：1-15

参考文献

- 来嶋洋美・梁嶋史恵・楠本はるみ・荘由木子・福谷正子 (1994) 「中級文型の格付けの試み—既刊教科書における頻度調査に基づいて—」『日本語国際センター紀要』第4号：13-34
- 久野由宇子・工藤節子 (1995) 「『文化中級日本語 I』における初級から中級への橋渡しの試み」『文化外国語専門学校日本語課程紀要』第10号：110-124
- 荘由木子・総田はるみ・梁嶋史恵 (1996) 「中級文型の格付けの試み (2) —新聞・雑誌の文中表現の頻度調査から—」『日本語国際センター紀要』第6号：71-81
- 羽田野洋子 (1989) 「初級段階から中級段階への移行期の教材」『日本語と日本語教育』第18号：13-27 慶應義塾大学国際センター
- フォード丹羽順子 (1996) 「『わがこと・ひとごと』の観点からの中級文法教材作成への一試案」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第11号：69-81
- 松本妙子 (2002) 「中級の日本語指導のあり方を考える—授業評価及び教材と学生のテキスト分析を通して—」『熊本大学留学生センター紀要』第7号：29-47
- 宮地裕 (1979) 「中級日本語教育の問題点」『日本語教育』37号：1-12
- 宮原彬 (1993) 「中級段階の指導と教科書」『長崎大学外国人留学生指導センター年報』第1号：34-39

注

1. 漢字圏の学習者といえば中国・台湾・韓国出身者ということになるが、短期プログラムは大学間協定の交換留学プログラムであることが多く、様々な国の大学が対象になっている。文部科学省の大学等間交流協定締結状況調査（平成18年度 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/09/07090416/002.htm）によれば、現在のところ、日本の大学の大学間協定の相手先は中国が1位（19.0%）、韓国が3位（10.9%）で3割を漢字圏が占めるものの、2位にアメリカ（17.0%）、4位にイギリス（5.2%）、5位にドイツ（4.0%）と、非漢字圏の国が続く。台湾を入れても漢字圏は約3割、非漢字圏は約7割ということになる。

【資料】 アンケート用紙

※本アンケートは中級レベルで勉強する留学生のみなさんが日本語の勉強や、文法についてどのように考えているかを調べるためのものです。次の質問にあなたの意見を書いてください。英語、中国語、韓国語で書いてもいいです。

国：() (もしよければ) なまえ：()

I. あなたの日本語学習歴について about your Japanese study history

1. どこで日本語を勉強しましたか。

・ 国で (年 月～ 年 月) 場所：
・ 日本で (年 月～ 年 月) 場所：

2. 日本語を勉強する目的はなんですか。 What is the purpose of your Japanese study?

II. 中級レベルの日本語について

1. 初級レベルに比べて、中級レベルでは何がむずかしいですか。What is difficult in the intermediate Japanese level compare with the beginner level?

2. 日本語の技能の中でどれが一番かんたん簡単ですか。What are the easiest Japanese skills for you?

話す 聞く 読む 書く 文法 漢字 その他 ()

3. 日本語の技能の中でどれが一番むずかしいですか。What are the most difficult Japanese skills for you?

話す 聞く 読む 書く 文法 漢字 その他 ()

4. 中級レベルで一番大切なことは何だと思いますか。What do you think is the most important thing in intermediate Japanese level?

5. もっと日本語が上手になるために、何が必要だと思いますか。What do you need to improve your Japanese?

→ うらのページへ go to next page

III. 中級文法^{ちゅうきゅうぶんぽう}について about intermediate Grammar

1. 中級文法の中で何が一番簡単^{かんたん}ですか。What is easiest in intermediate grammar?

2. 中級文法の中で何が一番難しいですか。What is most difficult in intermediate grammar?

3. J511とJ514で「新しいことば」^{しら}を調べる宿題^{しゅくだい}はどうでしたか。How was the homework which involved looking up new words?

4. J511とJ514で「作文」を書く宿題はどうでしたか。How was the J511 and J514 composition writing homework?

5. あなたはどのように日本語の文法^{ぶんぽう}を勉強^{べんきょう}していますか。あなたの勉強^{べんきょう}の方法^{ほうほう}についておしえてください。Please describe your study methods.

6. 中級文法^{ちゅうきゅうぶんぽう}についてコメントがあつたら自由^{じゆう}に書いてください。Please write if you have some comments about Japanese grammar (or classes J511, J514).

※ 以上のことを先生の研究^{けんきゅう}のデータ^たに使^{つか}ってもいいですか。あなたの個人情報^{こじんじょうほう}は絶対^{ぜったい}守^{まも}ります。いずれかに○をつけてください。 Can I use results of this survey with my research? I will protect your personal information. Please circle Yes or No.

はい、使^{つか}ってもいいです () いいえ、使^{つか}わないでください ()